「ひざ痛教室」 - 第７回 - 変形性ひざ関節症⑤

副院長の三上です。

第７回の「ひざ痛教室」です。よろしくお願いいたします。

今回は、“変形性ひざ関節症”の患者さんからよく質問されることについて、お話させて頂きます。

「ひざにたまった水を抜くと、くせになるので抜かない方がよいのでは？」とよく聞かれます。

変形性ひざ関節症は関節の軟骨がすり減っていく病気です。このすり減った軟骨の破片が関節の中に浮遊すると、やがて関節の内面を覆っている滑膜にくっつきます。人間の身体は、一度自分から離れたものを異物とみなして、攻撃し除去しようとする働きがあるため、滑膜が炎症を起こし（滑膜炎）、この軟骨の破片をとかす化学物質を含んだ関節液を過剰に分泌します。これがいわゆる、ひざに水がたまった状態です。

この化学物質はサイトカインと呼ばれ、異物をとかすばかりではなく、そのまま放置しておくと他の正常な組織までも攻撃するようになり、関節の中の他の部位の軟骨や半月板なども傷めてしまうことになります。従って、たまった水は抜いた方がよいことになります。さらに関節に水がたまる病気は変形性ひざ関節症だけではありません。変形性ひざ関節症では、黄色で透明な水がたまりますが、関節リウマチや痛風、偽痛風による関節炎では、乳黄色の濁った水がたまり、化膿性関節炎では膿が混ざった水がたまります。

関節液の性状について

・原因で性状が異なる

図1.変形性ひざ関節症：黄色で透明、粘り気がある。

図2.関節リウマチ：乳黄色で混濁、粘り気は少ない。

図3.痛風/偽痛風性関節炎：乳黄色で混濁、粘り気は少ない。

図1.変形性ひざ関節症

図2.関節リウマチ

図3.偽痛風性関節炎

他の病気との鑑別のためにも水を抜き、必要なら培養検査や関節液検査という検査も行います。

このひざに水をためる滑膜炎が治まらないと、水がまたたまることになります。くりかえし水がたまる場合は、原因を診断するため、軟骨や半月板などの状態を確認するためのMRIなどの画像検査や関節リウマチや痛風、偽痛風など調べる血液や関節液検査などを追加で調べます。そして、原因疾患がわかれば、その疾患に適した治療を行うことが必要となります。

まとめです。「ひざにたまった水を抜くと、くせになる？」というのは、

間違いです。ひざに水をためる滑膜炎が起きていて、異常な状態になっています。長く続くと、他の正常な組織にも影響を及ぼすこともあり得るため、水がたまることを繰り返すようなら、原因を調べ、その疾患に適した治療を行う必要があります。